

# 京都市全体の人の動き

## (1) 総発生集中量と生成原単位

- 京都市の発生集中量は、この10年間でほぼ横ばい
- 京都市に住む人の生成原単位は、2.58トリップ/人日

京都市の発生集中量は、平成2年から平成12年の10年間で1%の減少、夜間人口（5歳以上）は平成2年から10年間で1%の増加となっており、ともに**ほぼ横ばい**となっています。（図1、2）

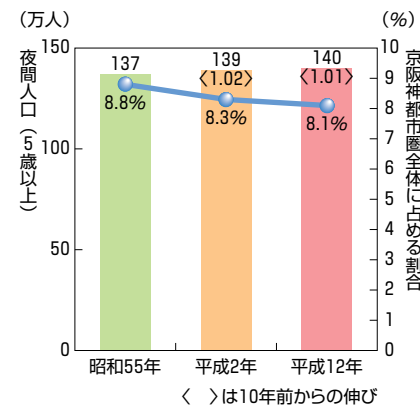
平成12年において京都市を出発地、あるいは到着地とする流動量は4,405千人トリップ/日で、そのうちの74.4%が京都市内から出発し、京都市内へ到着する京都市内々の流動となっています。

京都市内々の流動については、昭和55年から平成12年にかけて減少がみられるものの、京都市と京都市外との間の流動については、増加しています。（図3）

また京都市内に住む人の生成原単位は、**2.58トリップ/人日**となっており、平成2年とほぼ同程度となっています。

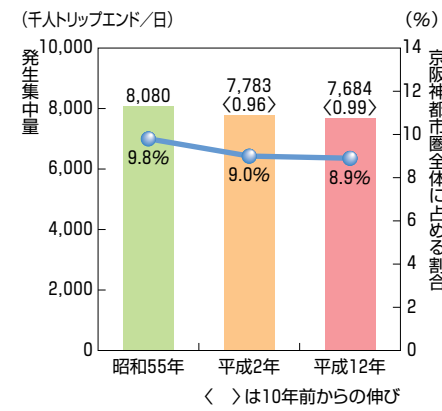
京都市居住者のうち、外出した人の割合については、平成2年から平成12年の10年間で2.1%の増加となっています。（図4、5）

図1 京都市の夜間人口（5歳以上）の推移（昭和55年～平成12年）



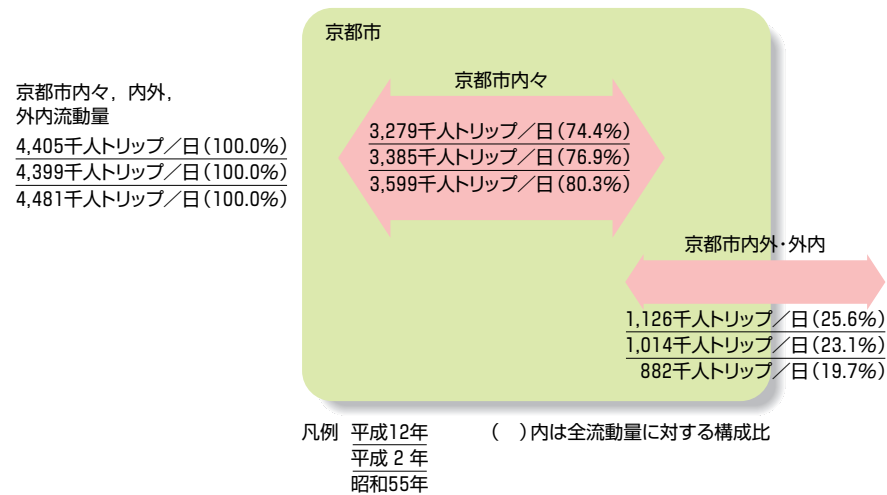
資料：国勢調査

図2 京都市の発生集中量の推移（昭和55年～平成12年）



資料：国勢調査

図3 京都市関連の流動量の推移（昭和55年～平成12年）



凡例 平成12年 平成2年 昭和55年 ( )内は全流動量に対する構成比

図4 京都市居住者の生成原単位の推移（昭和55年～平成12年）

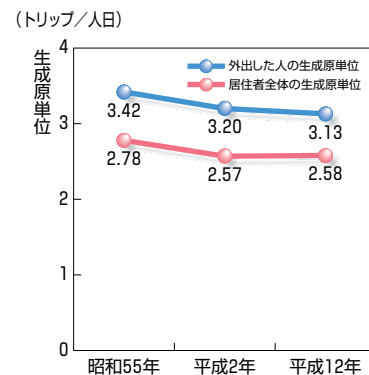


図5 京都市居住者のうち外出した人の割合の推移（昭和55年～平成12年）

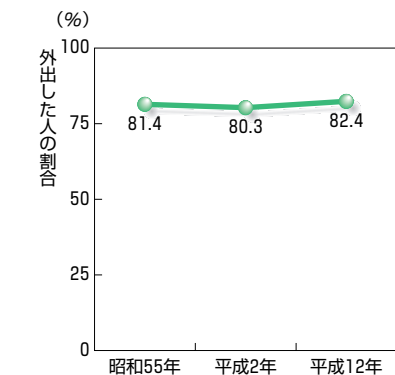
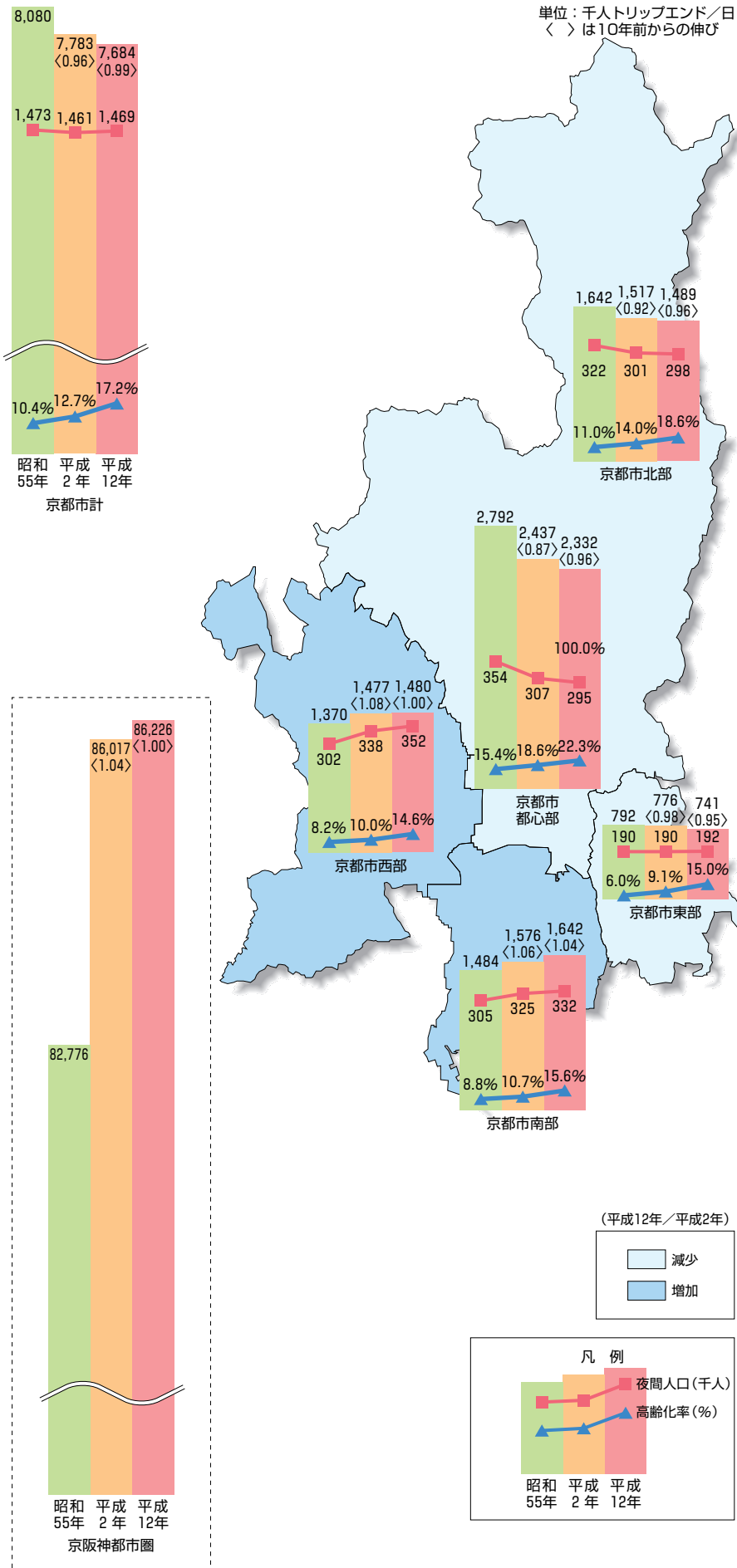


図6 京都市における地域別の発生集中量の推移（昭和55年～平成12年）



## (2) 地域別発生集中量

### ■京都市西部や南部の発生集中量は増加傾向

京都市における地域別の発生集中量をみると、**北部、都心部、東部**では昭和55年から平成12年にかけて**減少**傾向が続いています。この背景の一つとして、これらの地域の高齢化が進展し（表1参照）、相対的に外出機会・移動回数の少ない高齢者が増加したことが考えられます。

一方、**西部や南部**では昭和55年から平成12年にかけて、**増加**傾向が続いています。この背景の一つとして、宅地開発等による夜間人口の増加（表2参照）が考えられます。（図6）

表1 京都市における地域別の高齢化率の推移（昭和55年～平成12年）

	高齢化率		
	昭和55年	平成2年	平成12年
京都市北部	11.0%	14.0%	18.6%
京都市都心部	15.4%	18.6%	22.3%
京都市東部	6.0%	9.1%	15.0%
京都市南部	8.8%	10.7%	15.6%
京都市西部	8.2%	10.0%	14.6%
京都市計	10.4%	12.7%	17.2%

資料：国勢調査

表2 京都市における地域別の夜間人口の推移（昭和55年～平成12年）

	夜間人口		
	昭和55年	平成2年	平成12年
京都市北部	322	301	298
京都市都心部	354	307	295
京都市東部	190	190	192
京都市南部	305	325	332
京都市西部	302	338	352
京都市計	1,473	1,461	1,468

資料：国勢調査

### (3) 地域間流動量

#### ■都心部を中心とした人の動きが多い

京都市における地域間の人の動きをみると、**都心部を中心**に行われていることが分かります。この背景の一つとして、都心部には商業施設や業務施設等多くの事業所が集積し(表3参照)、多くの人々が訪れていることが考えられます。

また、平成2年から平成12年の10年間にわたる増減割合をみると、南部と西部との間の動きが8.7%の増加と、他の地域間に比べて大きくなっています。

次に、京都市全体と他の地域間の人の動きをみると、**京都府南部や滋賀県南部との間で多い**ことが分かります。この背景の一つとして、京都市に各種の都市施設が集積しているため、広い範囲から人々が訪れていることが考えられます。(表3参照)

京都市全体と他の地域間の動きの増減割合をみると、北大阪との間で16.4%の増加と、他の地域間に比べて大きくなっています。(図7)

表3 京都市における地域別の従業者数(平成8年)

地域	従業者数
京都市北部	115
京都市都心部	331
京都市東部	54
京都市南部	193
京都市西部	123
京都市計	815

資料：事業所・企業統計調査

図7 京都市関連の地域間流動量の推移(平成2年～平成12年)

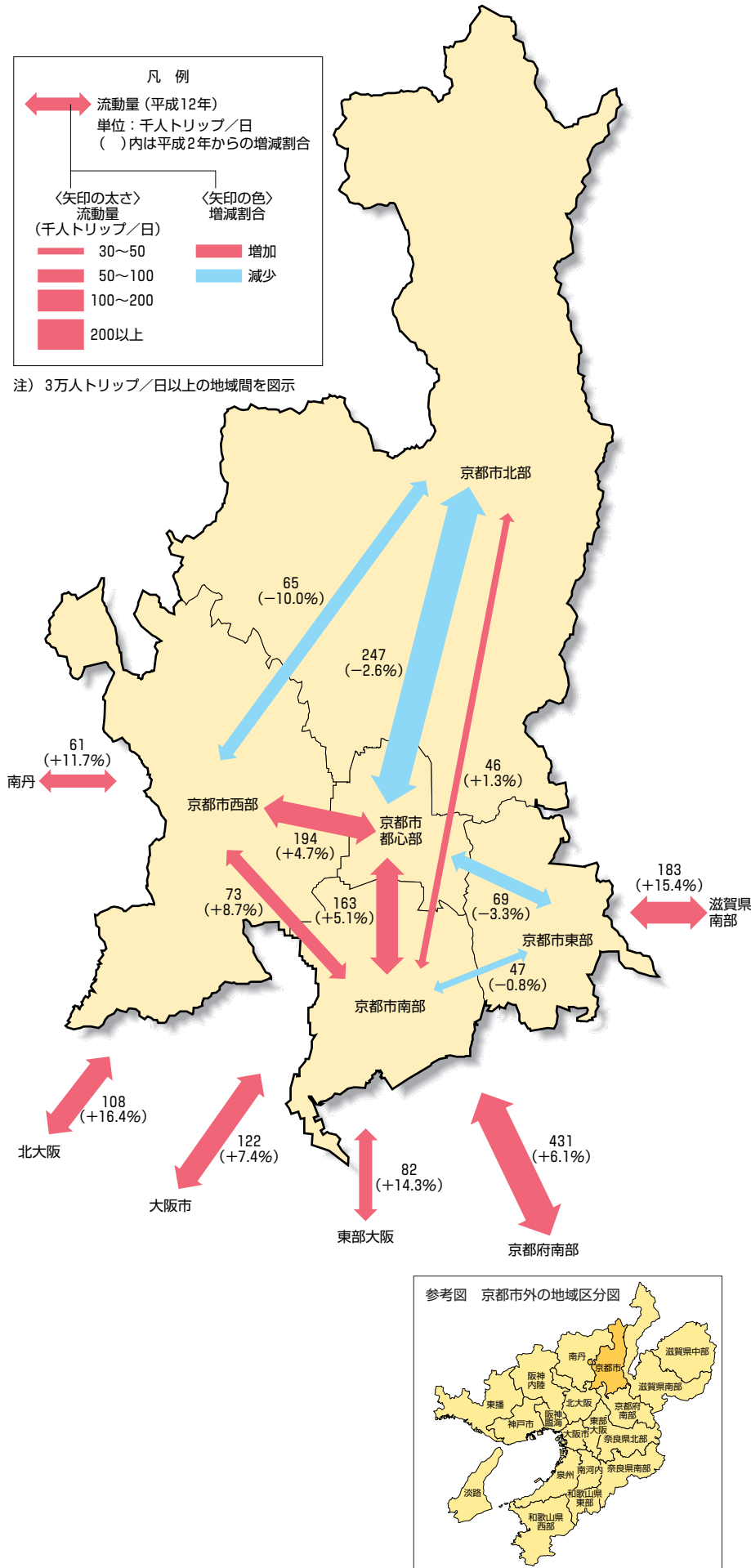


図8 京都市における発生量、集中量の目的構成の推移(昭和55年～平成12年)

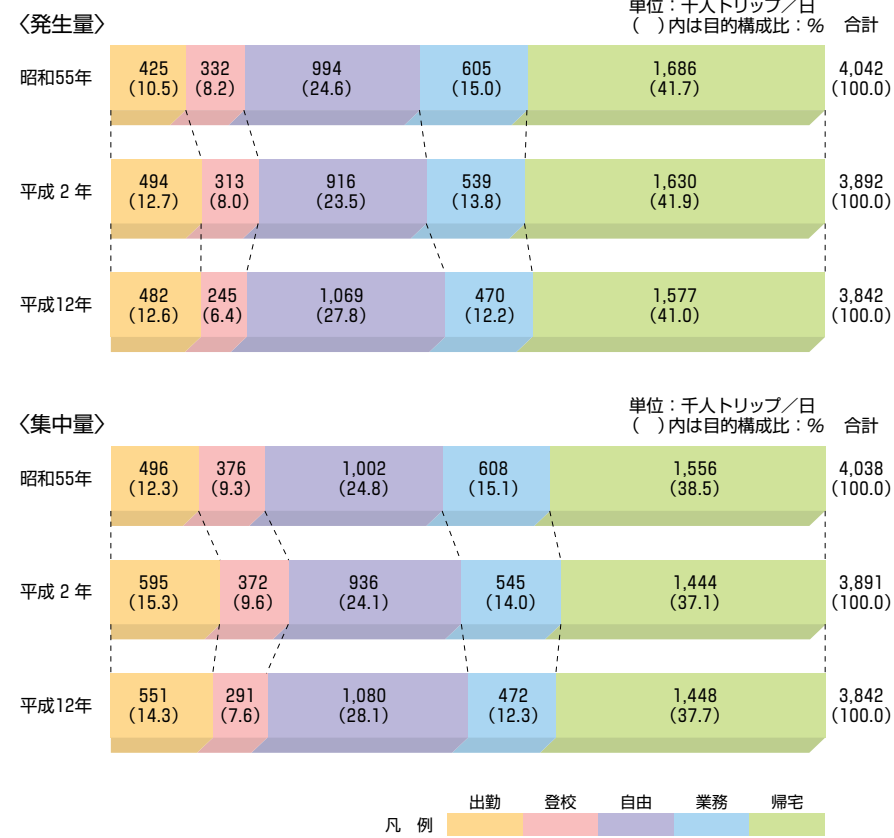
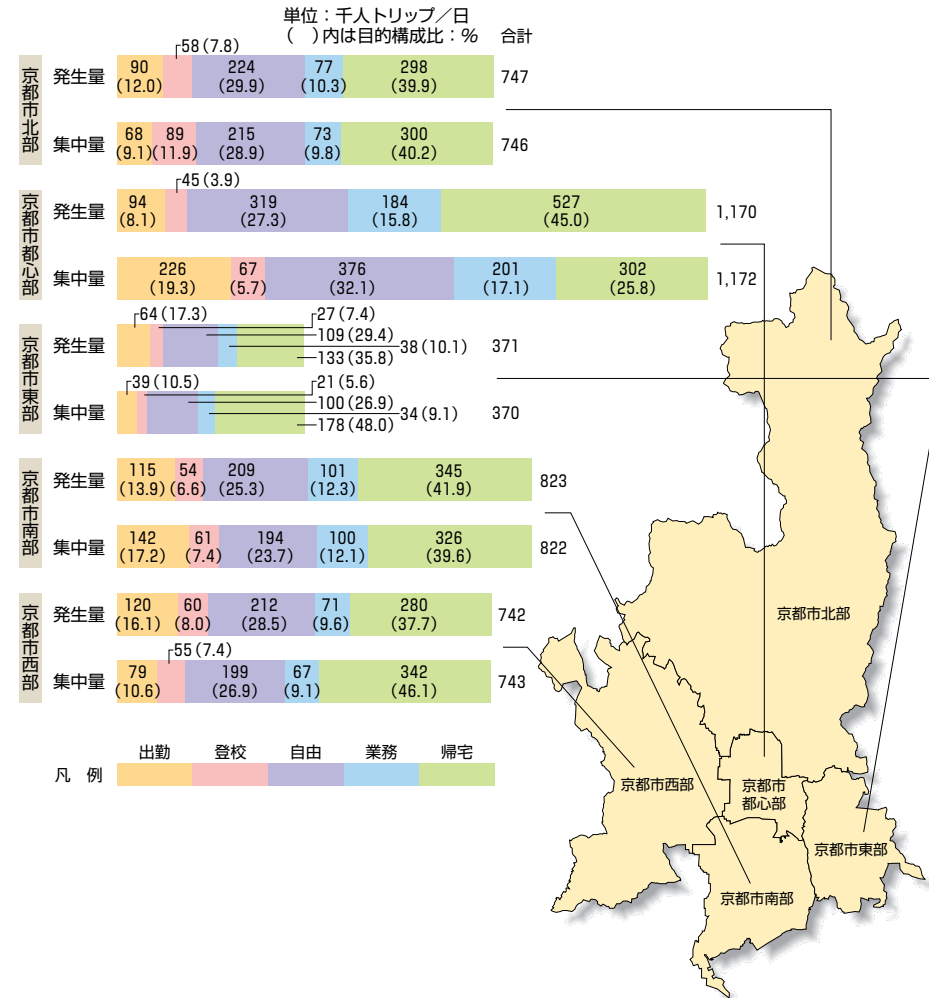


図9 京都市における地域別の発生量、集中量の目的構成(平成12年)



## 目的からみた人の動き

### (1) 目的別発生量、集中量

- 発生量、集中量ともに自由目的の割合が増加
- 京都市は他の地域の通勤・通学地

京都市における発生量、集中量の目的構成をみると、平成2年から平成12年の10年間で発生、集中ともに**自由目的の割合が約4%増加**しています。

また、目的別に見ると、出勤・登校目的では発生より集中の割合が高く、帰宅目的では集中より発生の割合が高くなっています。

このことから**京都市は、通勤や通学目的で市外から市内へ人が流入する地域である**ことが分かります。(図8)

### (2) 地域別目的別発生量、集中量

- 都心部、南部で多い人の流入

京都市における地域別の発生量、集中量の目的構成をみると、**都心部や南部では出勤・登校目的において、発生より集中の割合が高く、流入地である**ことが分かります。この背景の一つとして、商業施設や業務施設等の多くの事業所が立地し、多くの人々が訪れていること(表3参照)が考えられます。

反対に、東部や西部では出勤・登校目的において、集中よりも発生の割合が高く、流出地であることが分かります。(図9)